



TITLE:

Globalization and diversity in migration to Japan
Migration, whiteness and cosmopolitanism of Europeans in Japan(Digest_要約)

AUTHOR(S):

Debnár, Milo

CITATION:

Debnár, Milo. Globalization and diversity in migration to Japan
Migration, whiteness and cosmopolitanism of Europeans in Japan. 京都大学, 2014, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2014-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18635>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

Globalization and diversity in migration to Japan:

Migration, whiteness and cosmopolitanism of Europeans in Japan

グローバル化と対日移民の多様化

—在日ヨーロッパ人の移民、ホワイトネスとコスモポリタニズム—

Miloš DEBNÁR

デブナール・ミロシュ

本研究の目的は、「特権のあるコスモポリタン・エリート移住者」という「華々しいイメージ」としばしば結びつけられている「白人の国際移動」(white migration)あるいは「特権のある国際移動」(privileged migration)を実証的な研究に基づいて解体・再解釈することにより、現代の移民全体及び対日移民における新しい側面を社会的な観点から描き出すことにある。具体的には、その「華々しいイメージ」を移民・移動のパターン、受け入れ社会への統合におけるホワイトネスによる特権と、受け入れ社会での社会的関係の構築・維持という三つの観点を分析軸にし、彼ら／彼女らの移民経験を、未だに移民研究でよく見られる「被害者化された移民」(victimized migrants)対「特権のある移民」(privileged migrants)という二項対立を超えた形で、現代移民の特徴を指摘する。この目的のためには近年日本へ移住してきたヨーロッパ人の事例を取り上げ、57人のインタビュー調査の結果を分析する。

まずは、序章でこの目的を明確する前に、その背景を説明する。一般的に移民の理解を形成した、被害者とみなされる(非熟練労働)移民とコスモポリタン(高熟練労働)エリートという、対立する二つのイメージを概要し、現代の国際移動の多様化と複雑性は、このような二項対立の不完全性・不適切性を暴露していると訴えた。具体的には、移民という現象は、強い経済的要因の背景を持ち、発展途上国ないしグローバル・サウスから先進国ないしグローバル・ノースへ移動する人々と関連付けることが多い一方、諸資本を豊富に持ち、「自由に」世界を回るエリートの存在も認められてきた。だが、グローバル化が進む中、移民の方向、動機やその帰結がより多様かつ複雑になり、このような二極的な捉え方が不十分になってきていることを指摘し、近年の研究成果もそのような傾向を示唆していることに注目した。特に、後者のエリート層の国際移動に関しては、未だに仮定・想定に基づいた理解がよくみられ、彼らの移民パターンと動機、受け入れ社会への統合と生活世界が「特権のある」(privileged)ものとして位置づけられてきた。このような理解に対しては、日本へ移動する一世のヨーロッパ人移住者の事例を取り上げ、実証的な研究を行うことを目的にする。ヨーロッパや北米といった地域からの移住者は日本の中で長い歴史を持ち、近年急増を記録し続けていることにかかわらず、極めて少数の場合にしか研究対象になっていないことが本研究の重要性かつ時事性を強調している。さらに、この事例にさらには二つの特徴があり、近年芽生えてきた「白人の国際移動」あるいは「特権的移民」(privileged migration)に関

する研究への貢献を明らかなである。その研究では、対象はほぼ満場一致で「西洋」というカテゴリーに限られてきたが、それ以外の地域から移動する白人を研究対象に含めることが経済政治的なグローバル化・社会変動を反映する重要な点であり、白人（あるいは先進国から）の移民研究に新しい知見をもたらすと考えられる。そして、今までの研究では、西洋の植民地という歴史を持つシンガポールや香港、あるいは発展度合が未だに「西洋」のレベルに達していないと見做されている中国のような地域への移動が注目されてきたが、そのような歴史を持たず、経済社会的に「西洋」に相当する程度まで発展してきた日本は、白人にとって「異質的」な移住先として重要な事例になってくる。つまり、ヨーロッパという枠組み及び非西洋の先進国の日本といった本事例の二つの特徴と、批判的な分析的アプローチを採用することによって、対日移民の見逃された側面および先進国からの移民の多様化を訴える最近の研究に貢献することを目指す。

続いて、第一章では、本研究の目的に言及する三系統の研究をレビューした。まずは、対日移民を取り扱う主流の研究を概観し、これらは経済的要因によって移動する数か国の非熟練労働者の移民パターンに限定されがちであると指摘した。それに対しては、ヨーロッパや日本の対外移民を取り扱う研究の中では移民動機の複雑性と多様化を訴える研究が表れ始めたが、対日移民ではこのような移民パターンの可能性が見逃されてきたと訴えた。続いて、移民の統合を概要した上、このプロセスにおけるホワイテネスの役割に注目した。批判的人種研究（critical race studies）の中ではホワイテネスには「特権」が必然的に伴うと訴えられてきたが、このような見解が最近浮上してきた「白人の国際移動」を取り扱う研究の中で採用されると同時に、その「特権」の再生産の限界も示唆されてきた。最後には、移民者の社会的関係に関する研究の一部を紹介した。すなわち、移民研究の「脱エスニック化」を訴える研究と最近移民のコスモポリタニズムを論じる研究の接点を示し、このような接点を考慮するアプローチは本研究で移民後の社会的関係の構築・維持とそれにおけるエスニシティの役割を理解するためには重要な理論的枠組みかつ分析的概念を提供すると指摘した。

第二章では本研究のために実施した調査と採用した方法を説明した。本研究ではインタビュー調査を主なデータとして用い、合計で 57 人とのインタビューを集めた。具体的には、2008 年 8 月から 2009 年 9 月の間には、在日チェコとスロバキア人のパイロット調査を行った後、2011 年 7 月から 2012 年 5 月の間にさらに 20 か国の 48 人のヨーロッパ人とインタビューを行った。基本的にはスノーボール方式のサンプリングを用いたが、この方法の弱点としてよくあげられてきた個人的ネットワークによるバイアスを軽減するためには、複数の地点（node）からフィールドをアプローチし、対象者を出身地域別、男女別と在留資格別で選抜した。調査によって得られたデータを質的データ分析ソフト（NVivo）で分析したが、計量及び統計的分析方法を使用したわけではなく、質的データとして分析と結果の解釈を行った。

第 3 章から第 6 章までは、インタビュー調査の結果の序論で説明した三つの視点から

分析した。まずは、第3章と第4章でヨーロッパから日本への国際移動のパターンに注目した。第3章ではその歴史的背景を概観してから、現代（つまり、1980年代後半から）の移民パターンの類型化を試み、統計データを分析した。近代日本におけるヨーロッパ人は明治時代の「お雇い外国人」から長い歴史を経てきたが、1980年代後半から急激な増加が始まり、ピークを迎えた2008年までに3倍以上まで増加してきた。その背景には、進化してきたグローバル化の帰結、すなわち旧ソ連圏諸国からのエンターテイナー女性及び女性の結婚移民と（主に西欧から）高熟練労働移民の増加があると想定されてきたが、在留外国人の統計は、留学と留学生の定住化や一般的に国際結婚の増加のような、それ以外のパターンも明らかにしている。したがって、ヨーロッパ人の対日国際移動を説明するには、西欧からの高熟練労働対東欧から女性の労働・国際結婚移民という二項対立のカテゴリーが不十分であり、多様化してきた移民パターンの複雑な姿を探究する必要があると指摘した。

第4章ではこの多様な移民パターンを把握できるために、インタビューを分析し、移民動機に注目した。特に、学生の国際移動、国際結婚と「熟練労働」とみなされるパターンに着眼し、それらを形成してきた構造的要因と個人的動因を分析した。その結果、今まで移民の理解において支配的だった経済的動機が多くの場合に重要な役割を果たしていなかったことに対して、日本への憧れのような文化的要因やキャリアよりライフスタイルといった非経済的動機の重要性が浮上してきた。このような移民パターンを説明するには、社会の個人化理論を採用する研究の観点を採用したが、社会の個人化が「伝統的」な社会的構造から個人を（ある程度）解放することによって個人の移動性が増したという従来の説明に加えて、進歩、安定と予測可能性に基づくモダンティが「流動化」していく中、（日本社会での）機会の（比較的）不在、移民の妨害の存在や移民結果の予測不可能性にもかかわらず（日本への）移民が社会的に正当化でき、妥当な選択になりうると主張した。最後には、移民における連結された偶発性の重要性を強調し、その偶発的な出来事が行動を決定する一つの要因であるため、このような移民の理解をするには今まで主流であった手段目的枠組みが不十分・不適切であると指摘した。

第5章では、在日ヨーロッパ人の統合とその経験における彼ら／彼女らの人種、すなわちホワイトネスは、果たして特権しか生まないかを俎上に載せた。つまり、移民パターンのエリート層あるいは優遇される高熟練労働というイメージを批判的に見直してから、白人のヨーロッパ人の統合経験に注目した。特に、彼ら／彼女らが日常生活において経験する多数派との接触と労働市場への統合の実態と経験に着目し、その経験にはホワイトネスによる特権と日本社会でよく見られる他者への排他的眼差しの両方がどのように反映され、彼ら／彼女らの社会的位置をどう形成するかを吟味した。その結果、方向が違う後者の要素によって、ホワイトネスの「効果」が必ずしもプラスの方向に働くわけではなく、文化的消費などに相対化された形で社会的地位に相反の効果ももたらす。具体的には、まずは白人であることは日本社会でもスチグマ化されたアイデンティティではなく、日常生活において明らかな差別、または特定の職業における「有利」をもたらすことを認める必要がある。だ

が、その同時には、白人でありながらも外国人（あるいは外国生まれの者）として日本社会で「永続的な他者」であるという強い社会的意識の根強さと、他の移民と似たような形で彼ら／彼女らには人種・国籍別で期待されている分業が存在することが対象者の語りから浮上してきた。さらには、多くの対象者は文化的資本を主なスキルとして活かす職業に従事していた一方、他の職業をアプローチする際には多数派から強い抵抗を感じたと語った。つまり、特権を伴う職業に就いている白人の一部がいながらも、近年日本へ移動してきた東西両方からのヨーロッパ人の多くが、労働市場における限られた移動性しか持たず、社会的地位が必ずしも高いわけではない、不安定な職業に就くこともよくみられる。そのため、先進国からの国際移動、または「白人の国際移動」を論じる際には、白人と特権が必然的にセットになっていない可能性を認め、その帰結を慎重に分析する必要があると訴えた。

第 6 章では、在日ヨーロッパ人の最後の側面として、渡日後の生活世界におけるコスモポリタンの思考と同時に日常生活におけるエスニシティの意味と役割を取り上げた。この二つの側面・アイデンティティが対立的な関係にあるとしばしば考えられ、先進国からの移民は共通の人間性 (shared humanity) の理想に基づいたコスモポリタニズムと関連付けられてきた。本研究の対象者においてもコスモポリタンの思考の要素が見られるが、それはエスニック・アイデンティティを否定するわけではないという特徴があると強調した。すなわち、彼ら／彼女らのコスモポリタニズムは理想的思考より、そういった理想に意図的に従わない「奇形」(deformed) の実践であると同時に、エスニシティが社会的組織化の主な原動力でも、「自然な連帯」の資源でもないが、日常生活における重要なアイデンティティの一つであるという見解を示した。このような、多重なアイデンティティを認める「コスモポリタンの社交性」(cosmopolitan sociability) はさらに先進国・白人の移住者のイメージを解体しながら、エスニック化された(労働)移民像対コスモポリタン・エリートという二項対立的な捉え方を曖昧化すると言える。

終章ではこの論文の結果をまとめ、その帰結とこれからの研究課題について考察した。まずは、先進国、西洋あるいはグローバル・ノースから他の先進国の移民は多様な姿を持ち、必ずしも高熟練労働のエリートではないことを示した。このような見解はこの移住者の受け入れ社会での社会的地位からも覗え、ホワイテネスは特権をもたらすだけでなく、白人であつても他の移民と似たような問題に直面することがあると示唆した。最後には、コスモポリタンのエリート対エスニック化された(労働)移民という二項対立の枠組みで現代の在日ヨーロッパ人の生活世界(あるいは社交性)を捉えることができず、より複雑な生活世界を理解するには両方のアイデンティティに同時に注目する必要性があると訴えた。この結果は、対日移民における新しい側面を暴露し、移民多様化への傾向をこれからの政策・方針に反映する必要があると指摘した。また、グローバル化が進んでいる現代の中、多様化かつ複雑化する人の国際移動の新しい姿を示めすことによって、今までしばしば見られた移民の二項対立の捉え方に強く意義を申し立てたことが移民の普遍的な捉え方に対する本研究の貢献であると考えられる。

とはいえ、本研究の分析と結果からもまだまだ追求しなければならない課題があることも分かり、今後の研究の可能性の見取り図を最後に描いてみた。第一に、対象者の間に見られたコスモポリタンの思考性は、多様化している（日本）社会で「誰が誰と生活・接触する」という質問を、日本人、他のエスニックあるいはマイノリティ諸集団との関係性を含めてより深く探究する必要性を示唆していると言える。第二、「マルティレイシャル」の世代、すなわち日本で「有利」と思われる立場を持つ「ハーフ」の数が増える中、移民と異なって受け入れ社会の国籍（citizenship）を大抵持っている彼ら／彼女らの社会的地位、社会的移動のパターンや日常生活における差別経験の有無などを人種による特権とその限界の存在を議論する研究で視野に入れて俎上に載せる必要があると指摘できる。そして第三には、本稿ではヨーロッパへの日本人の移民と日本へのヨーロッパ人の移民は相互的な関係にあると示唆したが、特に国際結婚において家族の滞在国をどのような基準で選択し、そのような選択パターンには性別、学歴、キャリアや子供の教育等の要因がどのような役割を果たしているかを、日本と西洋に制限されていないヨーロッパの両方に研究する必要があると言える。このような課題を取り上げることによって、増加とともに多様化していく移民現象の変化する姿をより正確に理解することができ、移民する様々なグループないし個人と移民にかかわる諸社会が直面する問題の理解とその問題の解決に貢献することができると考えられる。